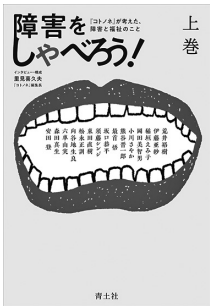
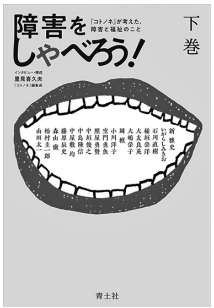
報告 書評・芸術評

問われていく

大泉 えり[1),2)]

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）東京都医療的ケア児者親の会





障害をしゃべろう！上巻 下巻
『コトノネ』が考えた、障害と福祉のこと
里見 喜久夫 インタビュー・構成
青土社
2021 年

「この子、ロボットなんですか？」

確か娘が小学二年生くらいの頃だっただろうか、同じ小学校の四年生の賢そうなメガネ男子が、私に尋ねてきた。人工呼吸器を 24 時間使っている娘の医療機器などを搭載した車椅子姿を見ての質問だった。私は突然の質問にビックリしたけれど、悪意のない素朴な疑問だと感じたのでフツーに答えた。

「あ、人間です。君、大きくなったら将来さ、人とロボットの違いを研究してみたらいいよ。」

サイボーグみたいな重度障害児との出会いから生まれた彼の素朴な疑問が、いつか、人や社会に繋がっていけばいいなぁと、ちょっと余計な期待を込めてしまった。

そんなエピソードを思い出したのは、この書評コーナーの原稿のために読み始めた『障害をしゃべろう！』の中に、「弱いロボット」を研究する大学教授、岡田美智男さんが登場したからである。「弱さで、人の関係性を取り戻したい。」とある。

さて、今回ご紹介する書籍『障害をしゃべろう！』は、「コトノネ」という季刊誌の連載、〈ぶっちゃけインタビュー〉に掲載された原稿をまとめた本で、上巻に 15 名、下巻に 17 名の刺激的な「想定外」の対談が並ぶ。それこそ、農学者から能楽師まで！実に多様な方々への障害と福祉にまつわるインタビューである。

下巻に収録されている対談者、雑草生態学者の稲垣栄洋さんによれば、普段私たちが食べているお米、いまのコメは、1 万年前に突然変異で生まれた、言わば植物学的には「障害種」だそうだ。1 万株に一つぐらいしか現れない、実っても穂から実を落とさないコメ。だから、我々人間は収穫して食料として栽培できるようになったのだと。

そんな角度から障害についてアプローチしていくの?! という驚きと、現在進行形で地球に生きる多様な命や人間の生活を、当事者の視座で深めているリアリティに、たまらなく体幹揺さぶられる本である。

本の内容はぜひ読んでいただくとして、先の「障害種のコメ」で思い出した、私の所感をもう一つ書かせていただければと思う。

人工呼吸器等多くの医療デバイスや物品を搭載した車椅子の娘との移動は、公共交通機関の利用が大変で、専ら自家用福祉車を使っている。ペーパードライバーだった私は、娘の移動の自由のためにはやるしかないと覚悟して、出張講習を受け、主治医のいる病院までなんとか運転できるようになり、現在

1）リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
2）東京都医療的ケア児者親の会

は「旅は最幸のリハビリ」と考え、首都高を超えて遠くまで出かけられるようになった。とは言え、今も娘とヘルパーさんを乗せて都心を運転するのはかなりドキドキ緊張する。

渋谷の中心街を運転していた時のことである。ご存知の通り近年、渋谷では大規模な駅周辺開発プロジェクトが進行中で、道路工事のため私は車のナビの指示がよく分からなくなってしまった。直進するところを左折車線に入ってしまって信号待ち、車線変更禁止域だけど直進車線に戻ろうと思えば戻れるな、と良からぬ思いが一瞬浮かんでいた。信号が変わると、すぐ前のトラックが直進車線に戻っていった。そしてなんと、たまたま居合わせたパトカーにすぐさま捕まったのである。

私はそのまま左折して、遠回りしたけど軌道修正してその道に戻った。でも、そのトラックは、私だったかもしれない。トラックのドライバーが代わりに引き受けてくれたとも思えた。ああ、世の中のいろんな出来事の確率というのは、いつ誰に起こってもおかしくないものだとしみじみ思ってしまった。もちろん、一瞬でも交通違反をしようと考えるのは論外だけれど。

先天的な疾患を持って生まれることや、アクシデントで不自由な身体になってしまうことは、生物にとってはありうることだ。私かもしれないし、あなたかもしれないし、誰にとっても自分事として捉えるべきことである。

トラックの後ろに大きく、「誠」と書かれてあったのが忘れられない、「誠の話」である。

随分と話が逸れてしまったが、『障害をしゃべろう！』を読み進めていくと、自分自身が様々に問われていく。ケアはなぜ生まれるのか？「当事者であること」ってなんだろう？私はどんな構えで言葉を使っているのか？私にとって「自由になる」ってどういうことか？

もしかすると、人とモノを繋ぐリハビリテーション・エンジニアリングの分野にも通じる大切な問いが、この本の中にあるかもしれない。